

逆説の日本史（14）近世爛熟編 — 文治政治と忠臣蔵の謎
（井沢元彦、2007年、小学館）

禅も大乘仏教の一つだが、自力修業を重視する聖道門であり、他力を本願とする浄土門とは一見まったく対立しているように見える。だが、その浄土門にも親鸞の「善人なおもて往生すいわんや悪人をや」（善人ですら成仏できるのだから悪人は必ず仏になれる）という「大逆説」があるのはなぜだろう。それは大乘仏教そのものが、それ以前の個人の解脱（救済）のみを求める仏教（これを大乘仏教側では軽蔑の意味をこめて“小乗”仏教と呼ぶ）にあきたらず、大衆の救済を求めたものだったからだ。教えはなぜ説かれなければならないのか？それは迷える衆生がいるからだ。欲界（欲望の世界）で泥まみれになる人間がいるからこそ、その人たちを救うための新しい仏法がある、それが大乘仏教の思想だ。そして新たに数多く生まれた大乘仏典を整理した中国の高僧天台智顛（ちぎ）が、その中で最高と評価した経典こそ、「妙法蓮華経（法華経）」である。最高の法が蓮華の如く美しく説かれた経典という意味だが、ではなぜ「最高の法」の象徴が「蓮華」なのか？

「蓮華」とは「レンゲ」のことではない。あれは「レンゲソウ」という植物だ。これはハスの花のことである。では、なぜハスの花が仏教を象徴する花になったかといえば、汚い泥の中から見事な花を咲かせるからだ。花畑でもなく王者の庭園でもなく、泥沼の中から咲くからである。泥沼が「欲界」そして花が「悟り」を象徴していることは言うまでもない。ドロドロの欲望の世界があってこそ、初めて悟りへの道が開けるとというのが、大乘仏教が本来持っている「大逆説」である。それは別の言葉でいえば、どんな悪人でも仏になれる可能性を秘めているということだ。あらためて言う。「ハスは泥沼の中に咲く」のである。その凡人でも仏になれるという理想を阿弥陀如来という絶対者への絶対的帰依つまり他力本願によって達成しようとしたのが法然であり親鸞であり一遍であるわけだ。一方「先輩」である釈迦が修行の末に如来となったことを見習い、修行を極めればやはり仏になれると考えたのが栄西であり道元だ。特に道元は、読経や座禅といった仏教本来の修行だけではなく、日常の仕事も、たとえば僧侶が寺院の食事を調えるために食材を買うことすら修行すなわち「仏への道」と位置づけた。この考え方が、正三においては「農民は農民、商人は商人として己の本分を尽くせば仏になれる」という形に発展し、沢庵においては剣法のような「人殺しの技術ですら極めれば仏の道に通ずる」という形に発展した。それが現代でも本来は「プレイボール（ボールで遊ぼう）」というゲームを「野球道」にしているわけである。（～p 295）